加入国際学術団体に関する調査票

1　国際学術団体活動状況（内規第 11 条　活動報告）BM

<table>
<tr><td rowspan="3">団体名</td><td>和</td><td>国際科学史技術史・基礎論連/科学基礎論部門</td></tr>
<tr><td>英</td><td>International Union of the History and Philosophy of Science and Technology/
Division of Logic, Methodology and Philosophy of Science and Technology
（略称　IUHPST/DLMPST）</td></tr>
<tr><td>団体 HP（URL）</td><td>http://www.dlmpst.org/
（日本学術会議が加盟していることの記載　有　・　無　）
HP の Membership 欄で加盟団体が日本学術会議であることが、学術会議名と分科会名および事務局住所とともに明記されている。</td></tr>
<tr><td colspan="2">国際学術団体における最近のトピック
（学術の進歩、当該団体の推進体制の変化、国際機関・政府・社会との関わり方等）</td><td>DLMPST の主要分野は科学・技術の基礎的問題を論じる、論理、方法論、科学・技術哲学である。科学・技術と社会の関係、科学・技術や科学技術者の倫理ついての議論も対象としている。DLMPST は文理融合的な視点で科学・技術の根本を考察することを特徴としており、このことを通じて科学・技術の発展と人間社会の発展に貢献してきた。２１世紀の新しい科学・技術の進歩の基盤を担う論理の役割についての研究、新しい科学・技術や科学・技術方法論に対する哲学的研究がすすめられている。
DLMPST の国際大会や DLMPST の主催・共催などの国際会議の活動は以下の DLMPST の HP のウェブページに該当ウェブサイトへのリンクが貼られた一覧がある。
＜https://dlmps.org/pages/activities.php＞
また DLMPST の下には「計算の歴史と哲学」国際委員会（HaPoC）など、6 つの国際委員会が活動しているが、それえらの活動についてはこのサイトに各委員会の年次活動報告がリンクを貼られて掲載されている。このうち「論理学教育」委員会と「教育と科学」IUHPST 委員会は新設委員会で年次報告はまだ出されていない。

国際機関とのかかわり：
ISC には DHST と DLMPST が構成する IUHPST の代表が投票権をもつメンバーとして総会に出席するが、DHST・DLMPST に関係する研究者が ISC の常設委員会で活動している。隠岐さや香氏（本分科会委員長）が ISC の Standing Committee for Freedom and Responsibility in Science に、Sandra Mitchell 氏（DLMPST 第一副会長）が Standing Committee for Science Planning に、Jahnavi Phalkey 氏（DHST 評議員）が Standing Committee for Outreach and Engagement に、2022 年から 2025 年までそれぞれの委員として務めている。
また DLMPSI と DHST は、それぞれ単独で、CIPSH に加盟している。DLMPST 前 Secretary General の Benedikt Löwe 氏が 2023 年より CIPSH 副会長に就任した。また、2023 年 8 月には現 DLMPST 第二副会長の岡田光弘(本分科会委員)がホスト側責任者となって東京・慶應義塾大学及び東京大学で総会・併設国際会議が開催された。</td></tr>
</table>

当該国際学術団体が対応する分野において学術の進歩に貢献した事例	科学・技術の基盤の理解、科学的知識の性格、諸科学理論で前提とされる概念の明確化などの諸問題に対して、哲学的観点や論理分析的観点に中心軸を置いた「科学・技術の学」への貢献をしてきた。科学・技術と社会とのかかわり、科学者・技術者の倫理の問題の現代的議論に貢献してきた。具体的な科学と技術の哲学的・論理的基礎論研究の学術・社会への貢献の例は多数挙げることができる。諸科学理論の変革の理解に対して科学哲学的分析の有効性が示されてきた。進化論や量子力学や情報概念や集合論の解釈をめぐる論争など多くの重要な論争に哲学的・論理的分析が関わってきた。たとえば、現代の意識科学を議論したり、AI とこころを比較する議論をするには、これまでの哲学的議論を前提にして議論が位置付けられている。科学的知識や論理の研究は科学や科学的「思考」のあり方を解明してきた。その時々の社会からの新しいニーズにより新たな科学哲学的研究分野が誕生し続けている。エビデンスの哲学、フェイクニュースの哲学などもそのような例である。科学・技術の社会的問題に対して、哲学・論理により概念整理を提供して問題解決に向けた議論に寄与している。上に言及した、集合論論争に対する貢献とそこから現代のコンピュータ理論の誕生への貢献は本領域の貢献の典型例と言える。 20 世紀初頭、数理的諸学の基盤としての集合論にパラドクスが発見されたが論理的分析を通じて解決された。この新しい「論理」研究手法は「計算とは何か」という問いへの探究に結び付き、現代のコンピュータの計算論的基盤が与えられた。その後、論理と計算の密接な関係がさらに明らかにされ、計算機・情報科学基礎論の発展に貢献した。これらは科学基礎論分野の貢献の典型例として挙げられる。これと並行して、科学哲学関連分野の「心の哲学」をはじめとする伝統的哲学に影響を受けながら「人工知能の哲学」が生み出され、認知科学・人工知能論など他分野と影響を与え合いつつ進展を続けており、自律的アルゴリズム環境における諸問題も検討されつつある。これは科学方法論や認識論の問題としても重要であるが、個人生活や社会に関わる側面も視野に入れ、例えば DLMPT2021 のシンポジウムでは、アルゴリズム環境の公平性、公正性、透明性などをテーマとした議論もなされている。 上記の＜CIPSH との連携＞欄でも特記したように、DLMPST と CIPSH の提案により 2019 年 UNESCO 会議で「UNESCO 世界論理デー(World Logic Day)」制定が決議され、科学技術・社会・人間の理解に共通する論理の役割と貢献の重要性が宣言された。UNESCO 世界デーの制定例は他にも多くあるが、純粋な学術組織からの提案によって UNESCO 世界デーが制定され、UNESCO が広くそのテーマの意義を全世界に発信するのは極めてまれである。哲学・論理・基礎概念分析から進められた本分野の成果や影響力が単に学術界に留まらず、広く一般社会に共有すべきものであることをよく物語っている。 上記のように、現代社会の新しい AI アルゴリズム情報環境に

	おける倫理的問題への取り組みについて触れたが、倫理の広い分野に対しても多くの議論がなされてきた。生命倫理や科学・技術者の倫理など、社会・科学者活動・倫理を結ぶ問題性をいち早く学問領域として学術的に取り上げてきたのもDLMPST 分野の特徴であるといえる。科学・技術政策論及び科学・技術教育論についても豊かな研究実績がある。これらが可能であったのは、本 DLMPST が、科学・技術的視点と人文・社会科学視点を同時にもつ研究手法を特徴とするからである。また 2023 年第 17 回ブエノスアイレス総会・コングレスでは、パンデミックのなかで生じてきた科学や科学に基づく政策立案などに対して生じてきた諸々の問題を検証し、不確定な世界の下で科学とその価値をどのように確立するかという問題に向き合うことが求められたが、この問題を中心課題に据えて論理と科学・技術哲学の手法の有効性が議論されてきているところである。
政策提言や世界の潮流になりそうな研究テーマ・研究方式・研究助成方式等	パンデミックを中心として経験してきた不確定な世界の中で、科学とその価値を再確認する課題が 2023 年のブエノスアイレス総会・コングレスで検討され、論理と科学・技術哲学の果たす重要な役割が確認され、討論の経過が世界に発信された。また、このコングレスが契機となって、本テーマについて様々な角度からの検討が加えられつつある。 2019 年 11 月 UNESCO 総会で DLMPST とその人文科学系上位組織 CIPSH の提案により、「UNESCO 世界論理デー(UNESCO World Logic Day)」が制定された。この世界デーは、DLMPST 分野の主対象である論理が人間の思考や科学・技術の基礎や AI・コンピュータネットワーク社会環境の発展に貢献したことを再認識するためのものであると意義付けられ、同時に我々の社会の AI・コンピューティング環境の諸問題を人間中心とした立場から解決していく方向性も示された。UNESCO 世界論理デー制定についての UNESCO 事務局長宣言にもあるように、その方針の下で 2021 年 11 月に UNESCO Recommendation on Ethics for AI が人間中心の AI 環境のためのグローバルなレベルでのガイドラインとして制定された。DLMPST はこのテーマの関わる学術イベントを以下のように積極的に推進してきているところである。 (1)日本側 IUHPST 分科会の協力学会である科学基礎論学会との共催形式によるデジタル環境の公平性・公正性・透明性に関する DLMPST 公開シンポジウム開催(2021 年 6 月大阪) (2)DLMPST-DHST コンピューティング史・コンピューティング哲学委員会と日本側 IUHPST 分科会の二つの協力学会とによるデジタル環境社会の歴史・哲学に関する２つの会議（2024 年 6 月東京） (3) DLMPST 側のイニシアティブによりデジタル環境と人文学の関係を主要テーマの一つとして開催された CIPSH 総会・国際会議(2023 年 8 月東京) 以上が、DLMPST によるこのテーマの一連の活動を示すものであるが、いずれも人間の社会を取り巻く AI・デジタル環境

	の諸問題を DLMPST 領域の文理融合的な視点から研究する諸手法が議論され、広がりを見せていることを示すものである。 加えて教育面においても新たに動き始めている。2015 年に DLMPST で制定されたヘルシンキ宣言に沿い基礎科学及び科学哲学の教育面の充実を提唱し、2022 年 UNESCO 国際基礎科学年においてもこれを推進してきたが、論理教育に関わる委員会と科学と教育を科学の歴史・哲学の双方から検討する DLMPST と DHST とが共同で取り組む委員会が 2023 年ブエノスアイレス総会で新設された。これらの委員会の創設により今後論理の教育、科学技術医学の教育の歴史的哲学的倫理的な側面が広く深く検討され、これらの教育面でのイニシアティブは今後世界的に広がりをもっていくものと期待される。
日本人役員によるイニシアティブ事項や日本の参加によって進展や成果があった事例	DLMPST の評議会では日本人の岡田光弘（慶応大学教授）が 2016 年から 2019 年までアセッサーとして評議員を務め、2024 年から 2027 年まで第二副会長として評議会役員を務めているところである。岡田ならびに他の日本人研究者のイニシアティブによる活動は以下のとおりである。 新しいデジタル環境と社会との関係についての問題提起や潜在的問題の提起が日本人評議員岡田光弘によって打ち出され、このテーマの DLMPST シンポジウムが 2021 年に本分科会の協力学会である科学基礎論学会との共催で開催された。これは科学・技術系と人文・社会科学系の関連分野を横断する DLMPST の特徴をよく活かした研究のスタイルがとられたもので、同シンポジウムは DLMPST の 2021 年の２つの中核的学術活動の一つと位置付けられた。 DLMPST 評議員委員岡田光弘を含む日本側のイニシアティブにより、DLMPST の人文科学系上位組織である CIPSH（哲学人文学会議 : UNESCO により 1949 年に設立された人文諸科学統括組織）の総会及び国際会議が 2023 年 8 月に東京（慶應義塾大学三田キャンパス及び東京大学本郷キャンパス）で開催され、岡田らが同会議のプログラム立案、主要テーマの選定に関わった。日本側が提案した“Humanity Studies on Disagreement, Communication and Mutual Understanding”が二つの主要特別パネルの一つとして採用され、このパネルでの講演や議論の成果が“Disagreement in Logic and Reasoning”特集として *Annals of Japan Association for Philosophy of Science*, vol. 33, 2024 に掲載刊行されることになっている。 ISC(国際学術会議)の Regional Focal Point for Asia and Pacific の DLMPST-代表を岡田が第２副会長として務め、その参加活動を通じて ISC-Open Science Round-Up への寄稿や提案書評価など、ISC の Open Science 活動に協力した。 また、2023 年ブエノスアイレス総会で岡田光弘が第２副会長に選出され、2024 年から 4 年間その職務を務めているところであるが、2023 年の総会では岡田ら日本代表が次期総会・コングレスの日本招致開催内容のプレゼンテーションを行い、それが評価を受け、2027 年総会・コングレスが日本の神

	戸で開催されることになった。これにより、次期総会や次期コングレスの内容に関して日本側の貢献が大きく期待されているところである。 　他の日本人のイニシアティブや参加による国際的学術活動の進展や成果としては以下のことがあげられる。 　2019 年プラハ大会のワークショップでの討議に基づいて、日本人オーガナイザーたちが中心となり、ワークショップテーマの特別号が欧文学術誌に出版された。(「統計学の哲学:Philosophy of Statistics」特集号 Annals of Japan Association for Philosophy of Science, vol. 30, 2021)。また、この後継シンポジウムが日本人研究者グループのイニシアティヴによって、2023 年ブエノスアイレス大会で開催された。 　DLMPST の主要 International) Association Member である ASL（国際記号論理学会）では 2016 年に常設地域委員会をアジア地区に設置した。設置以来、日本人委員が役員を務めており、この地域委員会が隔年開催する Asian Logic Conference の委員会でも常に日本人委員が加わっている。2026 年には日本で開催されることが決定している。 　DLMPST 分野の関連学協会では、旅費補助などで日本人若手研究者に DLMPST コングレス発表機会を与え研究者の育成につながるよう努力してきている。（一例として、日本人の若手女性研究者が旅費支援を受けて 2019 年プラハ・コングレスで発表し、専門家からの批判的コメントをもとに改良して学位論文を完成させたことを挙げることができる。）
当該団体に加入していることによる日本学術会議、学会、日本国民にとってのメリットや変化	<日本学術会議へのメリット> 　科学・技術の諸問題に対する哲学的・方法論的議論及び科学・技術の基礎に対する論理的議論は、科学・技術の進歩とともに常に新展開し続けている。この領域の国際的代表組織である DLMPST はこれら議論展開の場および情報集約の場を提供している。これらの国際的議論に参加し新しい問題性や成果の情報を得ることは日本における科学・技術の発展のために重要であり、それは日本学術会議にとってのメリットである。科学・技術の新しい問題性の同定や議論に日本からも参加して影響力を与えることもメリットと言える。人文科学的分析法も用いながら科学・技術の現代的議論を学術的に展開する領域は少なく、日本学術会議の科学・技術推進事業にとって欠くことができない要素を持つと考えられる。 　新しい科学・技術の発展や新しいデジタル環境の広がりの多くが社会的諸問題と切り離せない今日において、科学・技術分野と人文科学的・社会科学的分野の両者を繋ぐ DLMPST 分野の社会的意義は大きく、この観点から日本学術会議へ貢献している。 　DLMPST は DHST とともに、ISC だけではなく人文諸科学を統括する CIPSH とも深い繋がりをもち、両者で活動している特別な立場にあることから、両者の学術情報・動向を国内の学術界ならびに学術会議内で共有するための役割を果たし得る。現代社会においては、これまでに増して科学・技術と人文

	科学・社会科学が接近する局面が多くあり、科学・技術とそれらの社会科学的・哲学的・論理学的側面との両者を横断的に専門の分析対象としている DLMPST の役割は大きいと考えられる。 　上記のように、DLMPST 次期総会・コングレス(2027 年神戸)、DLMPST 人文系上位組織 CIPSH 総会・コングレス(2023 年東京)、DLMPST 提案による UNESCO 世界論理デー制定(2019 年)に関連する多くの DLMPST 活動もこのことを示している。 <諸学会へのメリット> 　DLMPST 次期総会・コングレスが 2027 年 8 月神戸で開催されることが 2023 年ブエノスアイレス総会で決まった。科学基礎論学会をはじめとする国内 IUHPST 協力諸学会が共催・協賛学会となり、神戸大学が共催ホスト校となり、IHPST 分科会を通じて日本学術会議と連携して開催する。日本で開催することの学術的恩恵は日本の諸学協会・研究者・学生にとって大きい。2027 年日本開催の総会・コングレスには世界中から第一線の研究者たちが来日するだけでなく、多くの DLMPST 所属国際学会がコングレスでシンポジウムを組むとともに、所属していない国際学会の中にも既に DLMPST コングレスの直前・直後に会議の開催を検討している学会がある。若手研究者・大学院生を含め本分野の日本の研究者にとって、神戸コングレスおよび関連学術イベントは研究発表や国際交流の大変よい機会を提供することとなる。 　DLMPST に所属し、DLMPST 分野の最先端の研究の動向を関連国内諸学会と共有することは我が国の本分野の学術水準の国際的優位を今後も維持するために不可欠である。また、DLMPST の研究者交流の枠組みを利用して国際的第一線の研究者たちと密接なコンタクトを取り続けることは、国内関連諸学会がシンポジウム国際組織委員会メンバーを選ぶ場合や、国内関連学会が欧文誌や欧文論文掲載誌などの国際レフェリーを選ぶうえで大きなメリットである。2021 年には DLMPST と科学基礎論学会とが共催シンポジウムを開催し、2024 年には DLMPST-DHST 両部門共同設置委員会（HaPoC）と科学基礎論学会と日本科学史学会とが共同で２つのイベントを日本で開催したことなど、日本の学協会が DLMPST と連携することにより国際的に最先端の議論の場を提供できたことも諸学会へのメリットの一つである。 <日本国民へのメリット> 　DLMPST 領域の研究動向や成果は各種メディアを通じて一般国民に共有されている。例えば、国内関連学協会研究者などにより国内一般読者向けの書籍や雑誌記事などで広く伝えられている。科学・技術の基礎の問題、科学・技術と社会の問題、そして科学・技術教育や論理思考教育の課題について国内で検討していくときの重要な情報と知見を提供している。科学・

	技術政策、科学・技術教育、科学・技術倫理に関する様々な提言が DLMPST 関係諸機関から出されるが、これらは日本社会に高い価値をもつものと言える。2027 年日本開催のコングレスに向けて専門家以外の一般聴衆向けの講演会やイベントも企画されており、本学術分野の成果が日本国民に伝えられ高い価値をもつことが理解されるよい機会となるだろうと期待されているところである。
その他（若手研究者・女性研究者育成法、科学者の倫理に関する当該国際学術団体の基本方針や憲章、資金提供ソースの発掘における画期的な方策等の特記事項など）	DLMPST では、若手研究者の研究や学会参加の支援、発展途上国からの学会参加の補助などを行ってきている。また、財政状況が充分でない学術会合の企画者たちに対して Small Conference Grant の公募を毎年行い財政支援している。 ジェンダー平等の基本方針については、さらに進んだ倫理規定の作成を目指して、DHST とともに IUHPST レベルの作業部会を設置し検討作業を進めている。DLMPST が推薦した候補が ISC「科学の自由と責任」委員会委員に選任され、この分野でも ISC と連携している。 DLMPST 役員会はジェンダー差別のないポスト配置が考慮されてきた。 DLMPST は IUHPST を通じて、ISC の Gender Gap in Science プロジェクトに積極的に参加してきた。2017 年には研究者の gender equality に関する国際調査を行い、Gender Gap 会議への派遣をするとともに、2019 年プラハ、2023 年ブエノスアイレス総会・コングレスで Gender Gap プロジェクトのシンポジウムを開催した。DLMPST の役員選任にはジェンダー や出身地バランスが十分に配慮されている。総会・大会（コングレス）開催地に関しては、欧州に偏りがちだったが、地域差が生じないよう努力がなされ、成功している。 AI・デジタル環境のアルゴリズムの公平性・公正性・透明性の問題に新たに取り組み、DLMPST の持つ専門性を発揮した新しい視点を提案しているところである。ジェンダー差別や人種差別のない AI・デジタル環境実現もこの中で目指されている。特に、DLMPST の 2021 年主要テーマと位置づけて DLMPST 主催シンポジウムを日本で開催した。そこではデジタル環境のアルゴリズムが生成する差別の諸問題などについて議論され、情報論理、アルゴリズム論、AI の哲学、科学研究方法論と機械学習方法論の観点から、この社会的問題の同定と解決を目指して人文科学と科学・技術とが共同研究していく一つのあり方が示されたと言える

２　今後の予定について（内規第 11 条　活動報告）

総会、理事会の日本開催の予定（招致等の予定も含む）	2023 年ブエノスアイレス総会で日本の招致提案が評価され、次回 2027 年総会は神戸大学で開催されることとなった。
日本人の役員立候補等の予定	2023 年総会で日本から役員立候補を行い、日本人（岡田光弘）が第 2 副会長に選出された。
現在、検討中の日本からの提言や推進するプロジェクト等の動き	AI・デジタル環境の発展に伴う諸問題について日本のイニシアティブにより DLMPST,シンポジウムが開催され、その後継集会が DLMPST-DHST 委員会 HaPoC と国内 IUHPST 分科

	会協力２学会との共催集会の形で実施された。DLMPST の人文科学系上位団体 CIPSH 総会･国際会議及び､2024 年 CIPSH 創設 75 周年記念国際会議でも DLMPST 日本評議員（第 2 副会長岡田ら日本側のイニシアティヴで議論された。このテーマも含めて、2027 年神戸 DLMPST 総会・コングレスでの討議テーマを日本側から提案する。

３　国際学術団体会議開催状況（内規第 11 条　活動報告）

総会・理事会・各種委員会等の状況（過去５年間及び今後予定されているもの）	総会開催状況	2019 年（開催地：プラハ）　2023 年（開催地：ブエノスアイレス） 2027 年（開催地：神戸 ）
	理事会・役員会等開催状況	2019 年（開催地：プラハ）, 2021 年（開催地：オンライン）、 2023 年（開催地：ブエノスアイレス）、 2024 年（開催地：オンライン）3 回開催, 2024 年（開催地：オンライン）、 2024 年（開催地：オンライン）、 2025 年（開催地：オンライン）、 2026 年（開催地：オンライン）、 2027 年（開催地：神戸）、
	各種委員会開催状況	DLMPST-DHST 共同設置３つの委員会と DLMPST 設置 3 つの委員会とがそれぞれ頻繁に委員会を開催している。 主要委員会の主たる委員会開催状況は次の通り。詳細は DLMPST 公式 Webpage の Commissions 欄の情報参照。 ・Inter-Division Commission for the History and Philosophy of Computing (HaPoC) 18-20 Oct 2023 Warsaw University of Technology (Poland) 25 Oct 2024, Cambridge University (UK)18 June, 2025,Zoom Program Meeting hosted (Zoom ホストは 委員長) ・The International Association for Science and Cultural Diversity (IASCUD), 24–29, July 2023, at CLMPST, Buenos Aires (Argentina), 次回 June 29-July 5,2025, at CHST, University of Otago (New Zealand) ・DHST-DLMPST Joint Commission (JC). Joint Commission は両部門の協力を目指し、科学史・科学哲学の優秀な研究論文を 2 年毎に表彰している。 次回 July, 2025, at CHST, University of Otago (New Zealand) ・The commission on the Philosophy of Technology and Engineering Sciences (CoPhiTES), 24-29 July, 2023, at CLMPST, Buenos Aires (Argentina)

<table>
<tr><td rowspan="2"></td><td></td><td>・The Commission on Logic Education,
14 January, 2025 world logic day 1 with Moshe Vardi as the guest,
7 February, 2025 at Asian workshop on philosophical logic,
8 April,2025, Tools for teaching logic

・The core committee (for the CLMPST)
23 May, 2025, Zoom Committee Meeting, Zoom ホストは DLMPST-Secretary General)</td></tr>
<tr><td>研究集会・会議等開催状況</td><td>2021 年（開催地：東京）DLMPST 共催 Symposium “Fairness, Integrity and Transparency of Formal Systems: Challenges for a Society Increasingly Dominated by Technology”
（形式システムの公平性、公正性、透明性：科学技術に支配されつつある現代社会のための挑戦）

2024 年（開催地：東京）DLMPST-DHST HaPoC 委員会共催ワークショップ“Considering the Computing・Algorithmic Environments of our Lives and Society - from the viewpoints of history and philosophy of computing”
（急速に変化し続けるコンピューティング及びアルゴリズム環境に取り囲まれた私たちの生活と社会を考える ―― Computing の科学・技術史学と科学・技術哲学による視点から）
及び、そのサテライトワークショップ

このほか、DLMPST の 6 つの委員会はそれぞれのスケジュールで頻繁に国際集会を開催している。（DLMPST Webpage の Commissions 欄参照）。
また、DLMPST の small conference grants の支援により多数の conferences が開催されている（DLMPST Webpage の Small Conferences 欄参照）。</td></tr>
<tr><td colspan="2">上記会議等への日本人の参加・出席状況及び予定</td><td>2019 年、総会・コングレス（プラハ）、30 人（うち代表派遣 岡本健吾）
2023 年、総会・コングレス会議（ブエノスアイレス）、20 人（うち代表派遣：岡田光弘）
2021 年、DLMPST 共催会議（東京）、45 人
2024 年、DLMPST-DHST HaPoC 委員会共催会議および共同企画会議（東京）、50 人+40 人</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="5">国際学術団体における日本人の役員等への就任状況（過去５年）</td><td>
<table>
<tr><td>役職名</td><td>役職就任期間</td><td>氏名</td><td>会員、連携会員の別</td></tr>
<tr><td>Assessor</td><td>2016～2019</td><td>岡田光弘</td><td>（　　期）会員・連携</td></tr>
<tr><td>2nd Vice-President</td><td>2024-2027</td><td>岡田光弘</td><td>(26 期) 特任連携</td></tr>
<tr><td>Symposium Co-Chair</td><td>2019～2021</td><td>岡田光弘</td><td>（　　期）会員・連携</td></tr>
<tr><td>Congress of CMPST, Organizing Committee Co-Chair</td><td>2023～2027</td><td>菊池誠</td><td>（　　期）会員・連携</td></tr>
</table>
</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td colspan="2"></td><td>Congress of CMPST, Organizing Committee Co-Chair</td><td>2023～2027</td><td>岡田光弘</td><td>（26　期）特任連携</td></tr>
<tr><td>出版物</td><td colspan="5">1　定期的（４年に１回）　主な出版物名
Proceedings of the Congress of Logic, Methodology and Philosophy of Science and Technology, College Publishing

Bulletins of Logic, Methodology and Philosophy of Science, Mathematical Logic Quarterly
２　不定期（　　）　主な出版物名</td></tr>
<tr><td colspan="6">活動状況が分かる年次報告等があれば添付又は URL を記載
Division of Logic, Methodology and Philosophy of Science and Technology of the International Union of History and Philosophy of Science and Technology Bulletin no. 24 - 2024 - Mathematical Logic Quarterly - Wiley Online Library)
＜https://onlinelibrary.wiley.com/doi/10.1002/malq.202400004＞</td></tr>
</table>

４　国際学術団体に関する基礎的事項（内規第３条、４条、５条）

<table>
<tr><td rowspan="3">国内委員会（内規４条第３号）</td><td>委員会名</td><td>史学委員会 IUHPST 分科会</td></tr>
<tr><td>委員長名</td><td>隠岐さや香</td></tr>
<tr><td>当期の活動状況</td><td>（開催日時　主な審議事項等）
第 26 期　第１回　令和５年（2023 年）11 月 26 日
委員長を選出し今後の方針を確認した。
第 26 期　第２回　令和６年（2024 年）5 月 16 日
DHST 評議会の選挙手続き改正について報告、次回臨時総会の開催が変則的であるため周知徹底をはかった。
科学史学会国際会議（ICHST）2025 年度大会についての広報のあり方を審議した（日本科学史学会に広報を依頼）
DLMPST の Executive Committee Meeting が１月８日に、評議会が１月９日と 11 日にいずれもオンラインで開催されたことが報告された。
第 26 期　第３回　令和６年（2024 年）8 月 30 日
DHST の評議会と臨時総会の審議内容について情報共有、Respectful Behavior Policy、選挙での推薦手続きの改善について審議し、日本側の意見を集約した。
DHST の評議員の推薦について、候補者を一人選定した
DLMPST の活動として、上記のように HaPoC と国内学協会との共催ワークショップが開催されたこと、また８月にローマで開催された世界哲学コングレスにおいて DLMPST 主催の招待パネル「Should Scientists Listen to Philosophers」を開催し、DLMPST の第二副会長である岡田氏がパネリストを務めたことが報告された。
第 26 期　第４回　令和６年（2024 年）11 月 13 日
DHST 臨時総会報告および代表国際派遣手続き等について審議した。DLMPST 活動については、9 月に開催された CIPSH 設立 75 周年会議で岡田副会長が基調講演を行った。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">内規第３（国際学術団体の要件関係）</td><td colspan="2">国際学術交流を目的とする非政府的かつ非営利的団体である
①．該当する　　２．該当しない
※根拠となる定款・規程等の添付又は URL を記載（https://dlmps.org/pages/statutes/2023-statutes.php）</td></tr>
<tr><td colspan="2">各国の公的学術機関及び学術研究団体等が国際学術団体に国を代表する資格を有して加入するものが、主たる構成員となっている（主たる構成員が、いわゆる「国家会員」であるか否か）
①．該当する　　２．該当しない
※根拠となる資料の添付又は URL を記載（https://dlmps.org/pages/statutes/2023-statutes.php）</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td rowspan="3"></td><td colspan="2">下記の事項（ア～エ）のいずれか一つに該当するか（該当するものに○印）

ア 個々の学術の専門分野における統一的かつ世界的な組織を有するもの

イ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、統一的かつ世界的な組織を有するもの

ウ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、ア又はイの国際学術団体を連合した世界的組織を有するもの

エ 構成員のうち、各国代表会員がアジア地域等我が国が関係する地域等に限られるものであって、当該国際学術団体の研究の領域が複数の専門分野にわたるもの</td></tr>
<tr><td colspan="2">10 ヵ国を超える各国代表会員が加入している
① 該当する　　２．該当しない</td></tr>
<tr><td rowspan="2">加入国数及び主要な各国代表会員を10 記載</td><td>（37 ヶ国）</td></tr>
<tr><td>・各国代表会員名／国名
・National Committee: Committee for Logic, Methodology and Philosophy of Science/フィンランド
・Committee for Logic, Methodology and Philosophy of Science, provided by the Chinese Society for the Dialectics of Nature and the Chinese Society for Logic/中国
・Comité National Français d'Histoire et de Philosophie des Sciences et des Techniques/フランス
・Committee for Logic, Methodology and Philosophy of Science, provided by the Deutsche Vereinigung für Mathematische Logik und für Grundlagenforschung der Exakten Wissenschaften (DVMLG)/ ドイツ
・Committee for IUHPS,Indian National Science Academy/インド
・National Committee provided by Società Italiana di Logica e Filosofia delle Scienze (SILFS))/イタリア
・National Committee for Logic, Methodology and Philosophy of Science/チェコ
・National Committee for Logic, Methodology and Philosophy of Science and Technology for the Russian Federation /ロシア連邦
・Committee for Logic, Methodology and Philosophy of Science, provided by the British Society for the Philosophy of Science/英国
・U.S. Consortium for the History and Philosophy and Science/United States of America（Members: HOPOS, HSS, ISHPSSB, PS, SHOT, SLSA, AAHM）/アメリカ合衆国</td></tr>
</table>

（参考）
国内関係学協会（主要６団体）
主要学協会：科学基礎論学会、日本科学哲学会
他の関連学会：科学技術社会論学会、日本哲学会、日本科学史学会、応用哲学会